

東彼杵郡虚空蔵山の地質

地形図 1 : 50,000 「早岐」

阪口和則 (川棚高校)

松尾司 (長崎西高校)

JR川棚駅前に集合したあと石木、岩屋を経て虚空蔵山を目指した。

岩屋の集落を過ぎる頃 (標高150m) から道路沿いに板状節理のはっきりした溶岩がつづく。これは口木田安山岩 (阪口, 迎 1972) に属する複輝石安山岩で斜長石の大きな斑晶 (3.5mm) を含む、石基は褐色のガラスと針状の斜長石の微晶からできている。

標高270m付近には多孔質の複輝石カンラン石玄武岩が観察されるが、他の岩石との関係は明らかではない。

標高370mの林道の終点で下車し、登り勾配の続く杉林を黙々と歩いた。途中には露頭は見えない。

標高約430mの尾根に到着した。この尾根は彼杵との分水嶺にあっている。この付近では溶岩 (口木田安山岩) が観察されるが、風化がはげしく新鮮なサンプルが採れない。

尾根づたいに虚空蔵に向かうとすぐに高見岳凝灰角礫岩 (阪口, 迎) が見られ、標高550m付近まで連続する。

それ以上は、虚空蔵山複輝石安山岩で風化面は黄褐色を示し、内部まで深く風化している。斑晶は長柱状を示す普通輝石 (2~3mm) と斜長石で、石基は斜長石の微晶とガラスからできている。

この安山岩は板状節理と、それを垂直に切るおおまかな (幅5~10m) 節理をもっており、虚空蔵の比高50mにも及ぶ断崖をつくっている。

山頂付近の岩石は風化がはげしく新鮮なサンプルは採れない。

山頂では他のパーティーも多く、場所を確保するのに苦労した。空は曇であったが、時折、射す陽の光は夏のような暑さであった。

モヤが広がり遠望を十分に楽しむことができなかったことは残念であった。眼下には虚空蔵山を取り巻いて高見岳凝灰角礫岩がつくる特有な切り立った崖が見られ、その崖はそれぞれの尾根の頂上をつくっている。またさらに下方の石木付近では大規模な採石が行われ山の頂上まで達している。ここでは口木田安山岩の下位にくる百津安山岩 (阪口, 迎) が採掘されている。百津安山岩は細粒の複輝石安山岩である。

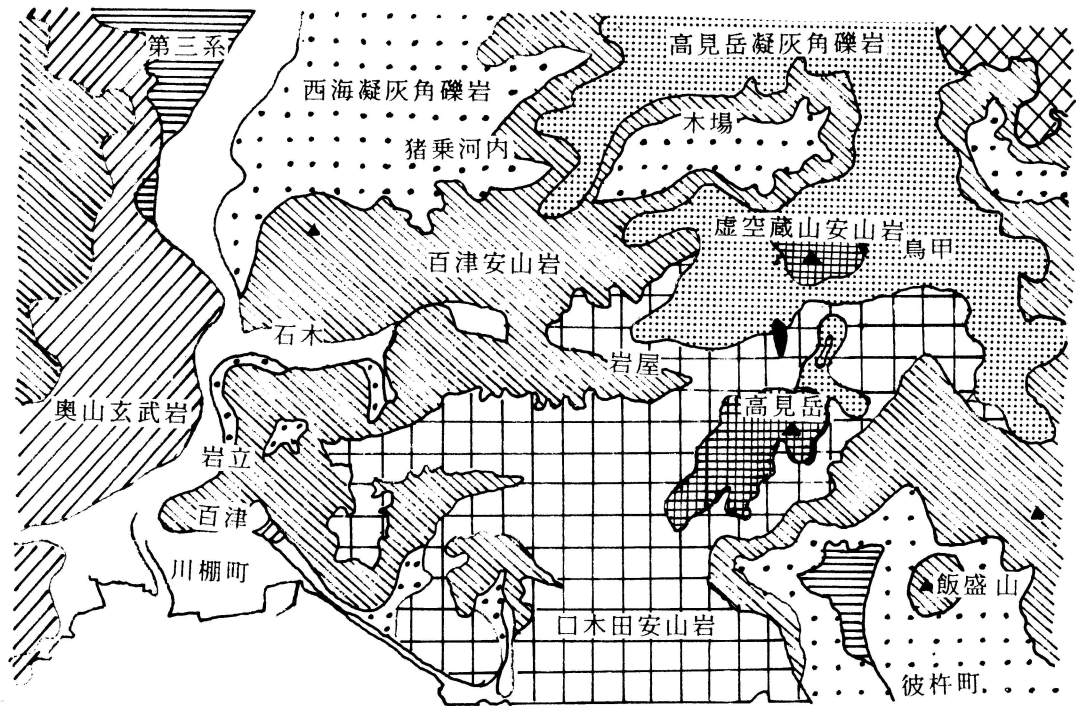
ここ数年石木ダム建設問題で地元がかなり神経を突がらしている状態にあるので、不必要に刺戟したり、誤解されることをおそれて今回はこの付近での観察は取り止めることにした。できるだけ早期の解決を望みたい。

山頂ではモヤを通して、360°の展望を楽しみながら地形、地質の説明を行った。

昼食時の小バエの大襲撃には音を上げた。その後、川棚高等学校文化祭のために川棚町岩立産のサヌカイト様岩石で作製した石琴の音色を聞いていただいた。金属音に似た美しい音であった。

下山の途中南東方にある鳥甲^{とりかぶと}まで足をのびし、高見岳凝灰角礫岩がつくる特徴のある切り立った地形を観察した。これは凝灰角礫岩というよりも自破碎溶岩とした方が良いのではないかという意見が出された。今後の詳しい観察調査が必要かもしれない。

下山して岩立へ直行した。ここでは川棚川に



虚空蔵山付近の地質図（1972を一部改変）

沿って、岩立から城山の住宅街へと抜ける道路が建設されつつある。

この地点では、サヌカイト様岩石の産状と板状節理の発達した百津安山岩との関係、その下部に見られる自破碎角礫岩を観察した。

サヌカイト様岩石は幅10m程のかなりせまい範囲にしか見られない。

今回は大正生まれの先輩がたが4人参加された。お疲れではなかっただろうかと気がかった。

参加者 15名

参加者名簿（記入順、敬称略）

山本 典子	鶴田 勝也	布袋	厚
原田 米一	吉田 利子	小林	茂
白石 成美	白石 忠通	光武	恒人
武内 浩一	阪口 和則	松尾	司
高嶺 忠彦	鎌田 泰彦	西村	進

訂正（削除）

長崎県地学会誌第46号（1987）図版Ⅲ， 3

川棚町白土に見られる層間異常（川棚町白土地点③）は日曜地質巡検記事第127回（昭和60年5月26日）「東彼杵郡坂本郷林道の地質」の地点③とは関係がありませんので削除をお願いいたします。御迷惑をおかけいたしました、慎んでお詫び致します。

この写真は川棚町の白石郷白岳の南東にある川棚白土のもので、松岳流紋岩溶岩以前の流紋岩質凝灰角礫岩および凝灰岩層からできている。この凝灰岩層の部分には写真のような見事な層間異常が観察される。木下亀城（1964）はこの中から淡水生物の珪藻化石を報告している。

県立川棚高等学校 阪口 和 則